留学生のための日本語初級e-learning教材の開発と課題

中　溝　朋　子

要旨

本稿では平成19年度より開発を開始した留学生向け初級日本語e-learning教材（①渡日前学習用教材、および②渡日後の初級前半の日本語コース用教材）について、開発の背景、教材の内容、同教材を用いた授業の実施報告、コース修了後に実施したアンケート調査の結果、および今後の課題について述べる。

キーワード

留学生、初級日本語、e-learning教材、渡日前学習、ブレンディッド・ラーニング

１ はじめに

本稿では平成19年度より開発を開始した留学生向け初級日本語e-learning教材（①日本語初級集中コース準備講座：渡日前学習用教材、以下「準備講座」）、および②日本語初級集中コース教材（渡日後の初級前半の日本語コース用教材、以下、「集中講座」）について、開発の背景、教材の内容、同教材を用いた授業の実施報告、コース修了後に実施したアンケート調査の結果、および今後の課題について述べる。

２ 開発の背景

2.1 本学における初級日本語教育の現状

本学の留学生センターでは、留学生対象の日本語科目として、共通教育、大学院予備教育、留学生センター開講科目などが開設されている。

これらの科目の中には、未習者のための初級レベルの授業も含まれてはいるが、受講者は他のレベルと比較すると少数の場合が多い。しかしこれは、必ずしも該当する学生が少数であるという意味ではなく、日本語を未習で来日する留学生が主に理系の大学院生、研究生であることによると考えられる。専門の研究に忙しく、ほとんどの場合、英語で研究が可能であるため、日本語学習に時間を割くことが難しく、授業も継続的に受講できないという場合が多いのが実情である。

一方で留学生センターも、予算の効率的な運用が求められ、科目の増設や学生に個別に対応する時間の増加は難しい状況にある。このような中で、学習者に限られた時間数で効率的な授業を行ったり、学習者ごとに異なる学習可能な時間を生かし、それぞれのニーズに応えるような機会を提供したりすることは難しいが非常に重要である。筆者はこれらを可能とするひとつの手段として、e-learning教材が大きな役割を果たし得ると考える。

2.2 日本語教育におけるe-learning教材

現在、日本語教育においても多くのe-learning教材が開発されているが、総合的

な初級日本語教材の代表的なものには、市販されている教材としてアルクによる「NetAcademy[1)]」が、無料で公開されている教材として東京外国語大学による「JPLANG[2)]」がある。ともに、既に出版されている教材を基にしており、音声やイラストを豊富に使用し、内容も充実した教材である。しかし本学においては、初級学習者は有料の「NetAcademy」を利用するほど人数は多くない。また「JPLANG」は、文字も含めて全くの日本語未習者が一人で学習を始める教材としてはデザインされておらず、ボリュームも多く、学習時間の限られている学習者には使用が難しいと考えられる。したがって両者ともに本学の初級学習者に適した教材とは言い難い。

３ 教材について

3.1対象者

以上のことから、開発するe-learning教材の対象者としては､｢渡日時に日本語が未習である学習者｣､さらに「渡日後も日本語の学習に多くの時間を割けず、継続的に授業を受講するのが難しい学習者｣､具体的には、主に理系の研究生、大学院生対象を設定した。

3.2 CMS

本教材のCMS(Course Management System)はMoodleを使用し、本学メディア基盤センターで管理するMoodle専用サーバを利用している。これにより、同センターよりMoodleに関する技術的支援も得ている。また学習者がこれらのe-learning教材にアクセスするためには、同センターが発行している大学のe-メールアカウントのID、パスワードが必要となっている。

3.3 教材の内容

以下、具体的に開発中の２つの教材について述べる。

3.3.1「準備講座」について

〈目的〉

「準備講座」の目的は、以下の２つである。ひとつは、日本の環境に早く適応できるように、渡日直後から必要となる日本語を学習した上で来日してもらうという点である。例えば、挨拶やよく使う表現（例：どこですか、いくらですか等)、自己紹介、数字などを知っていることは、渡日直後のコミュニケーションや生活に大いに役立つと考えられる。

ふたつめは、渡日後の日本語コースの効率化を図るという点である。入門レベルの日本語には、ひらがな・カタカナはもとより、基本的な語彙、数字など記憶すべき項目が多くある。そのため日本語学習に多くの時間を割けない学習者はここで躓く可能性も高いことが考えられる。したがってこの負担を渡日前に前倒しすることで渡日後の学習者の負担を軽減し、さらにはこれらの学習項目に費やす授業時間も節約しようとするものである。

＜内容＞

「準備講座」の内容としては、①Useful Expressions(挨拶・決まり文句・簡単な自己紹介等)、②Japanese Sounds（日本語のアクセント､音声の特徴)､③Hiragana､④Katakana､⑤Numeral System（日本語の数字､数え方等)､⑥Time Expressions(日付､曜日､時刻の言い方)」の６つのセクションを含んでいる。

＜使用方法＞

本学では、学生のID、パスワードは入学後に発行される。したがって渡日前に本学への入学が確定している留学生については、メディア基盤センターにおいて仮のID、パスワードを発行してもらい、本教材のURLとアクセス方法を録画した動画とともに、渡日約１か月前に学習者それぞれにeメールで送付し、学習を促している。なお「準備講座」につては別稿でもふれており[3)]、本稿ではこれ以降、

以下の「集中講座」を中心に詳述する。

3.3.2「集中講座」について

〈目的〉

本教材は、渡日後に行う１クラス90分、週３回、12週間のコース（「日本語初級集中コース」）の教材である。本コースは「準備講座」を終えた学習者を対象とし、主に日常生活に必要な口頭によるコミュニケーション能力を身につけることを目的としている。さらにこのコースでは、本e-learning教材を用いて授業の予習・復習を行うことで、授業中には文法・新出語彙の説明、文型練習など学習者一人でも可能な学習活動をできるだけ少なくし、口頭練習を中心としたコミュニケーション活動をより多く行えるようなブレンディッド・ラーニングを行うことを目指している。

＜留意 点＞

以上をふまえ、本教材では、以下のような点に留意し作成した。

① 学習者の日常生活、および大学生活に役立つトピックを選ぶ。

② 日常生活のコミュニケーションに必要な内容を身につけるとともに、次の学期に初級後半の授業を受講したい学習者が困らない程度の文法・語彙などの知識を身につける。

③ ひとつの項目は、最長でも15分程度で学習し終わる長さにする。

④ 本教材は、コースの受講者が授業の予復習で使用できると同時に、コースを受講できない学習者も自律学習用の教材として一人で使用できるように留意する。

⑤ したがってe-learning教材だけでも学習項目について理解・練習・理解の確認ができるようにする。

⑥ また、授業ではひらがな・カタカナを使用するが、本教材では文字の習得が不十分な学習者でも学習できるよう配慮する。

⑦ 本教材だけで学習する学習者も口頭のコミュニケーション能力を身につけられるように、文型練習、練習問題など、学習者ができるだけ話したり、聞いたりしながら理解や練習を行え、その場ですぐに回答も確認できるようにする。

＜各レッスン学習項目＞

各レッスンの内容は、以下の表１の通りである。各レッスンは３回（１週間）で進むことを想定している。

表１ 「集中講座」e-learning教材内容

課	トピック	機能	主な文法事項
1	自己紹介	自己紹介する	名詞文（現在） 等
2	買物・外食	値段・商品について情報を得る あいづち・簡単な印象を述べる	形容詞文（現在） 指示詞 等
3	交通	出発時刻・場所・交通手段を尋ねる 位置を尋ねる	動詞文（現在）(1) 基本的な助詞(1)
4	勧誘	誘う 電話をかける 習慣・予定を述べる	動詞文（現在）(2) 基本的な助詞(2) 等
5	写真の説明	過去の出来事について説明する	名詞文・形容詞文・動詞文（過去） 辞書形 等
6	待ち合わせ・ 道案内	待ち合わせをする 道を尋ねる	て形とその文型（～てください・～て、～てV、～ています） 等

7	規則	規則の表現を使う（許可・義務・禁止　等）	ない形とその文型（～ないでください・～なくちゃいけません・なくてもいいです）　等
8	日本人宅訪問	訪問するときの挨拶や表現を学ぶ 人を説明する	表現（おじゃまします・そろそろ失礼します）等 人物描写（結果継続の～ています、～そうです、なります）　等
9	国の紹介	お願いする アドバイスをもらう 自分の国について説明する	た形（経験：～ことがあります、アドバイス：～たらいいですか）・比較）　等
10	パーティー	インフォーマルに話す(1) 自分の感想・考えを言う 人の感想・考えを伝える	Short-form 現在形　等
11	謝罪	インフォーマルに話す(2) 理由を述べて謝る	Short-form 過去形　等
12	病院	症状を説明する 診断や処方を聞く	Short-form + んです　等

＜各レッスン構成＞

各レッスンは、Introduction、Dialogue、Vocabulary、Grammar Explanationから構成されている。以下、図１に各レッスンの構成を簡単に示す。

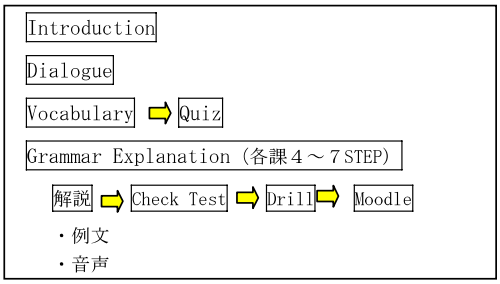


図１　各レッスンの構成

Introductionでは、該当レッスンのトピック、ゴール、学習する文型、語彙、Dialogueで聞きとって欲しいポイントなどが書かれている。

Dialogueは、トピックで取り上げられた場面のモデル会話である。Dialogueの登場人物や話題は、研究室で起こり得る人間関係や話題を取り上げるようできるだけ考慮した。

Vocabularyでは、該当レッスンで必要となる語彙を主に意味別にグループごとに分け、それぞれに簡単なクイズをつけた（Articulate®社のQuiz Maker[4]使用）。

Grammar Explanationでは、該当レッスンのトピックで必要となる文型をSTEPごとにひとつずつ取り上げ、図１のように音声付の例文をつけた解説、解説の理解度をチェックするCheck Test、文型のパターンプラクティスを一人で行えるDrill（Articulate® 社のPresenter[5]を使用）、さらにMoodleの小テスト機能を利用した練習問題を設けた。

以下、このような教材を使用して実施した授業の実施報告を行う。

４　授業実施報告

4.1 受講者

20年度は、常盤キャンパス（工学部）の留学生・研究者を対象にセンター開設科目（補講）として授業を行った。前期は４名、後期は17名が参加した。受講者の内訳は表２の通りである。

表２　2008年度初級日本語受講者内訳

	国籍別	身分別
前期	インドネシア３名、ミャンマー１名	博士３名、 研究生１名
後期	インドネシア11名、中国３名、 バングラデシュ、インド、韓国 各１名	博士８名、 修士２名、 研究生４名、 研究者３名

この後期受講（10月開講）の17名中11名については、９月初めにURLやID等を送付した。残り６名については受講を事前に把握できず、渡日前学習が行えなかった。理由は、２名は小串キャンパスの医学部の留学生であったこと、また３名は留学生ではなく研究者であったことなどによる。

4.2 授業実施方法

4.2.1 環境・事前準備

授業は週３回、学習者一人に１台パソコンが使用できる環境で実施した。またコース開始数日前に、「集中講座」のオリエンテーションを１回実施した。オリエンテーションでは、e-learning教材の使用方法や該当レッスンのSTEPの解説からDrillまでを予習・練習しておくことなどを指示した。

4.2.2 教科書・補助教材

筆者はe-learningのメリットには、印刷教材を節約できることもあると考え（紙の節約、学習者の経済的負担軽減）、またe-learning教材に書かれていることと同様の情報を印刷教材で配布するのでは、e-learning教材の意義が薄れ、利用が減ってしまうことを懸念した。そのため20年度後期は、e-learning教材の使い方、各課の大切な表現、文型、語彙リストを印刷したファイルを３課ごとに学生に配布した。ファイルを配布することにより、毎回授業で使用しているPowerPointや授業のアクティビティで使用した資料のプリントを各自がファイリングでき、最終的に各自１冊の教科書ができるような形にした。

4.2.3 授業の進め方と評価

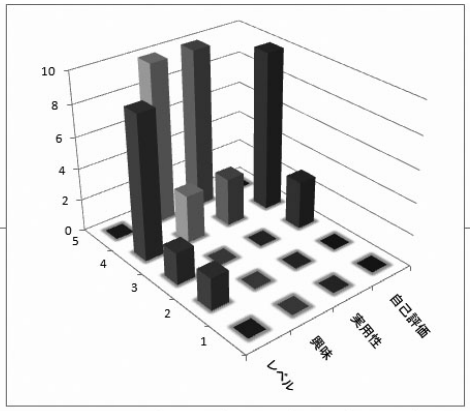
進度は、各課とも３コマで１課進んだ。授業は、最初の10分間は各自がe-learningサイトを使用して予習する時間とした。当初この10分間は、e-learning教材に慣れる目的で最初の２週間程度の予定で始めたが、多くの学習者からずっと続けて欲しいという要望があり、コースを通じて実施することとなった。

授業では、簡単にその日の学習内容・項目を説明・確認した後、口頭練習、コミュニケーション活動を主に行った。その際3.3.2で先述した通り、Grammar ExplanationのDrillまでは各自が予習することを前提としていたため、説明もパターンプラクティスのような練習もできるだけ短く行い、ペアワークを中心とした活動に時間を割くよう努めた。

各レッスン３回めには、各課トピックの場面・談話練習を行い、３課終了ごとに小テストを行った。

５ アンケート結果から

平成20年度後期授業終了後、アンケート調査を行った。回答した学生は13名（回収率76.5%）であった。



	5	4	3	2	1
	とても	すこし	どちらでも	あまり	ぜんぜん
■レベル（難しかったか）	0	9	2	2	0
■興味（面白かったか）	10	3	0	0	0
■実用性（役に立ったか）	10	3	0	0	0
■自己評価（希望する到達度に達したか）	0	10	3	0	0

図２ 受講者アンケート結果① - コース評価 -

図２は、本コース全体について、「レベル」「興味」「実用性」「自己評価」の４点について５段階で評価してもらった回答である。

このようにコース全体としては、肯定的な評価が多かったものの、e-learning教材に関しては、意見は様々であった。アンケートでは、普段の自分の授業外学習時間、またその中でe-learning教材を使用した時間の割合を回答してもらい、e-learning教材を使った、もしくは使わなかった理由について尋ねた。

以下、表３で、コメントの記入があった学習者についてのみ、それぞれの学習時間数とコメントを列挙する。

表３　受講者アンケート結果②　- e-learning教材へのコメントと授業外学習における時間 -

コメント分類	授業外学習回数、および時間：e-learning教材を使用した割合	コメント内容
e-learning教材に肯定的なコメント	毎日約50分　：e-learning 80%	日本語を聞いたり、練習したりした
	毎日約60分　：e-learning 10-20%	練習するのに役立った
	週２～３日に１回約30分　：e-learning 30%	コンピューターを使うのは好きではなく、紙で読んだり説明したりしてもらうほうが好きだが、e-learning教材はおもしろかったし、大切だと思った
	週１回約60分　：e-learning 50%	おもしろい教材だった
e-learning教材に否定的なコメント	週１回約60分　：e-learning 少し	e-learningで勉強するより、書いて覚える方が好きだから
	ほとんど勉強しない：e-learning 10%	e-learning教材よりも、授業で先生に説明してもらったほうがわかりやすかったから
e-learning教材に両面を持つコメント	週２～３日に１回約60分　：e-learning 20%	良い教材だったが、ときどきフォント・サイズが少し小さいと感じる
	週１回約10分　：e-learning 10%	e-learning教材はとても良いが、夜にはアクセスが難しい

e-learning教材に否定的なコメントの中には、各学習者の学習スタイルの問題、アクセスの問題、本教材に特有の問題など様々な要因が挙げられた。筆者は、個々の学習者の学習スタイルや好みによって、e-learning教材の利用状況に差が生じることはある程度やむを得ないことと考える。しかし肯定的コメントの中にあったように、教材の内容を工夫することによって、それまでe-learningに消極的だった学生であっても利用する可能性はあると考える。そのためにもアクセス、フォント・サイズなど、技術的に解決可能な問題はできるだけ対処していきたいと考える。

一方で、「授業の教師の説明のほうがわかりやすい」という理由でe-learningが使用されないのは、学習者が授業や教師に依存している状況であることが考えられる。本教材は継続的に授業を受講することが難しい学習者を対象として設定しており、今後はこのような教師に依存的な学習スタイルを持つ学習者でも自律的に学習できるように特に留意して、内容やインターフェイスを工夫していくことが必要であろう。

６　今後の課題

以上のようなことから、今後の課題としては、以下のような点が挙げられる。

6.1渡日前学習について

まず学習者、特に受講可能性のある学習者

の情報をできるだけ広く得られる努力をすることが必要である。また今回、渡日前学習の通知をした学習者の中でも学習状況はさまざまで、授業開始時には文字や語彙の習得状況にかなりの差があった。したがって渡日前学習を促す工夫が必要である。具体的には一方的なメールでの連絡や励ましだけではなく、双方的コミュニケーションが可能となるようにし（Skypeなど）、渡日後の生活を身近に感じ、渡日前学習への意欲を促すような工夫が必要であると考える。

6.2シラバスについて

学習項目やその解説、練習方法の改善は、今後も継続的に行う必要がある。特に今回は、アンケート調査の中にも「文法・文型・活用が多い（３名）」「語彙が多くて覚えるのが大変（４名）」といったコメントが散見された。本教材が対象とする学習者に特に必要とされるような文型、表現、語彙などを調査・考察し、学習項目を厳選していく作業が必要であると考える。

6.3ブレンディッド・ラーニングにおける印刷教材について

印刷教材に関しては、１名ではあったが、コース中より「文法説明も載せてほしい」という要望があった。アクセスに問題がある場合の教材として、またe-learning教材に不慣れな学生への導入的な学習手段として、印刷教材の役割をより積極的に考えていく必要があると思われる。今後は、e-leaning教材と印刷教材、さらには授業で使用するPowerPointファイルなどを有機的に結びつけ、学習者しやすく意欲を生む教材のあり方についてさらに考えて行きたい。

6.4読み書き能力について

本コースでは、口頭によるコミュニケーション能力育成を第一の目的にしており、文字の読み書きには重点を置かなかった。しかし、特に本コース修了後も日本語学習を継続したい学習者にとっては、文字学習は必須であり、文字学習を希望する学習者が授業時間外に自主的に学習できる教材の開発など、可能であれば行っていきたい。

７ おわりに

本教材の開発は、まだ始まったばかりであり、改良の余地が多く残されている。今後、できるだけ多くの学習者に利用してもらい、さらなる改善を加えて行きたい。

（留学生センター　准教授）

【謝辞】

本教材は、H19年度に山口大学教育研究後援財団、工学部学部長裁量経費のご支援を得たことにより、開発することができました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

またMoodleに関してはメディア基盤センターの刈谷丈治教授に技術的ご支援をいただき、webデザインに関しては教育学部情報科学教育課程、宮田綾子さんに作成していただきました。合わせて心よりお礼申し上げます。

【参考文献】

加藤由香里，2008，『日本語eラーニング教材設計モデルの基礎的研究』ひつじ書房

玉木欽也監修，2006，『eラーニング専門家のた

めのインストラクショナルデザイン』東京電機大学出版局
Nakamizo, Tomoko, 2008, *Development of e-learning materials for Japanese Language Study - Preparatory Lessons for Beginning Level Students before Their Arrival in Japan-* Proceedings, ITC-CSCC2008（CD-ROM版）
http://www.itc-cscc.org
日本イーラーニングコンソシアム編, 2005,『eラーニング導入ガイド』東京電機大学出版局

【注】

1) ALC NetAcademy 日本語コース(アルク)
http://www.alc-education.co.jp/academic/net/ja.html
2) JPLANG 日本語を学ぶ（東京外国語大学留学生日本語センター）
http://jplang.tufs.ac.jp/account/login
3 本稿参考文献Nakamizo, 2008
4) Articulate® Quizmaker
http://www.articulate.com/products/quizmaker.php
5) Articulate® Presenter
http://www.articulate.com/products/presenter.php